

2019年

3月10日

第324号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

草莽崛起（そうもうくつき）

園長 児嶋 草次郎

今さら何を言っても、負け犬の遠吠えにしか聞こえないのかもしれない。そう思いつながらも、福岡県立大学に向かいました。

福岡建立大学で教授をされている細井勇先生（石井十次研究で、博士号を取得された方）が定年退官記念の講演会をするので、私にも出てほしいと誘いがあったのです。それも単なる話だけではなく、「新しい社会的養育ビジョン」の作成者の一人である福岡市こども総合相談センター所長で精神科医師でもある、藤林武史氏との対談（鼎談）も考えていると言われるのです。千載一遇のチャンスです。

この「新しい社会的養育ビジョン」には、私は児童養護施設に対する強い偏見があると感じているし、直接施設現場の考えや伝統的文化を伝えることで、その施設否定論が少しでも和らげばというかすかな願いもありました。否、ビジョンはもう次の具体的な作業の段階に移ってきているのであり、何を言っても無駄かもしれない。しかし、このままこの流れに身をまかせておけば、20年後30年後、施設崩壊は確実に進んでいくだろうし、その時施設現場にいる職員たちに、「あの時先輩たちはなぜ抵抗しなかったんだ！」と責められないためにも、今回受けて立とう、そんな気持ちもありました。吉田松陰の草莽崛起（そうもうくつき）か。至誠でもって話せば通じるかもしれない？。

3月2日（土）、私たちは、午前7時前に車でジンチョウゲの香る友愛社を立ちました。私たちというのは、私以外に、石井記念有隣園の宮城園長、友愛園の指導員である杉田竹見君。杉田君はこの友愛園の卒園生で、友愛社の保育園等で調理師等をしていましたが、九州保健福祉大学の通信教育で資格を取り、2年前より友愛園の指導員をしてくれています。当事者として意見を言う機会があればと思い、一緒につれて行きました。

延岡で、九州保健福祉大4年生のアキヒコ君とアサミさん、そして教授の山崎きよこ先生にも同乗してもらい、総勢6名で一路、福岡県田川市へ向かいました。私は次のような作戦を立てました。

私のような在野の一施設長が、何だかんだと楯突いたところで、鼻であしらわれ

るだけだろう。生れ落ちてすぐ乳児院にあずけられ、2歳より18歳まで友愛園で生活したアキヒコ君と、5歳から18歳まで友愛園で生活したアサミさんに、まず最初に自己アピールしてもらおう。施設でもこんなに優秀な人材が育っているということを、会場の方々に分かっていただく。二人は今春大学を卒業し、アサミさんは都城の石井記念有隣園で働いてくれることになっているし、アキヒコ君は、鳥取県の鳥取子ども学園で何年か修行させていただくことになっています。二人とも一般の学生以上に高い志を持っており、私の自慢の“子”です。彼らに接して、それでも施設への偏見を捨てれないとするならば、その人間の感性は歪んでいるのであり付き合うに値しない。そのレベルの人間を相手にしたと思えばよい。

二人が話した後に、私がこのような人材（財）がどのようにして友愛園で育ったのかを、石井十次から継承する福祉文化の力として説明する。そして最後に「ビジョン」について触れて、その価値観について、アメリカの里親制度の崩壊を引き合いに出しながら批判する。

「ビジョン」において一番の問題点は、施設の在所期間を限定しようとしているところです。

就学前の子供は、原則として施設への新規措置入所を停止、施設の滞在期間は、原則として乳幼児は数か月以内、学童期以降は1年以内、特別なケアが必要な学童期以降の子供であっても3年以内を原則とする、などと書かれてあるのです。これだけは、どうしても取り下げてもらわねばなりません。今回はできるだけここに集中して訴えたい。

入所期間を限定するということは、例えば虐待の子供を早く家に帰してしまったり、施設や里親宅を漂流する子供を多く生み出しかねない。実際、アメリカでは、施設は1、2年で出ていかねばならない。ちなみにアメリカの里親宅での生活も平均2年間である。日本もアメリカと同じような状況を作ってしまう。そうなれば、施設から大学進学なんてことはとうてい考えられなくなってしまう。アメリカが現実にもうすでに、施設からの大学進学者はほとんどいない。児童相談所や施設がどんなに努力しても、施設で長期に生活しなければならないケースは必ずあるのであり、そこに何の根拠もなく施設生活を限定しようとするこの記述は、私に言わせれば、子供の最善の利益に反することであり、児童福祉法の理念にも背く取り決めだと私は強く考えています。

車は竹見君の運転で、ひたすら高速道路を北に向かって走りました。今回、山崎先生が同行してくださり二人にとっては心強い限りです。二人は大学に入学して1年間は、山崎先生の経営されているお年寄りのグループホームに下宿させていただき、アルバイトをさせていただいたり、生活面でも色々とお支援いただきました。施設からいきなりアパートではなく、このワンステップは、彼らの自立において、

かなり緩衝剤になったのではないかと思っています。その後も次々に我が園から九州保健福祉大には入学（現在8名）しており、先生には随分御迷惑をおかけして来ております。車の中ではみんな互いに同志として歓談できて、退屈することはありませんでした。約4時間半かけて、11時半すぎ、福岡県立大学に到着。

田川市は現在では人口5万程度ですが、かつては筑豊最大の炭鉱のあった所。明治以降の日本の近代化に随分貢献した町です。その跡地に町の再生への期待をこめて作られたのがこの県立大学。出迎えてくださった細井先生は、この敷地の下には縦横無尽に坑道が通っており、地盤沈下しないために水が詰めてあると教えてくださいました。

さて、大会です。福岡県立大学社会福祉学会主催で、大会のテーマは「福祉と教育から日本社会を考える―共生と連帯を求めて―」。「共生と連帯」という言葉の中に今の日本の社会的養育・養護に向けた、細井先生の願いがこめられているようです（現在細井先生はこの学会の会長）。残念ながら、会場には100人弱くらいしか人は入っていませんでした。九州・山口のすべての児童養護施設に案内の資料を送ったと細井先生はおっしゃっていました。「ビジョン」に対して、口で言うほど皆さん、関心はないんだと感じました。

まず、細井先生が「日本のミュラー・石井十次、ドイツの児童福祉、そして筑豊で出会った人々」という題で1時間ほど基調講演をされました。石井十次から始まった細井先生の研究は、イギリスに飛び、現在はドイツにまで広がっています。歴史研究だけではなく制度論・法律論にまで広がっていますから壮大で、そういう言わば世界地図上に今回の「ビジョン」を置いて考えておられますので、その欠陥がよく見えるのだらうと思います。時間が足りず、核心の部分に到達する前に話が終わった感じですが、「結論」の部分で細井先生は次のようにまとめておられました。

「・2000年頃から日本での規制緩和政策等新自由主義が台頭している。共生と連帯のための教育ではなく、階層的分断化の中で、個人としてのコミュニケーション能力が強調されている。」

「・社会的養護改革でも、アメリカのパーマネンシー計画をモデルとした方向性がある。『新しい社会的養育ビジョン』に対しては施設養護の歴史の否定であるという批判もある。

・日本の施設養護にはソーシャル・ペタゴジーの伝統が生きていると見ることは可能だと思う（全人的かかわりの重視等）。」

「ソーシャル・ペタゴジー」とは、ここではドイツの児童福祉と訳してもよいのだと思いますが、その原理の中に、細井先生は次のような点をあげ日本の伝統的な福祉・教育における考え方との近似性を指摘されています。

「・子供たちとスタッフは、同じ生活空間を共有している者と見なされる。両者は

階層的に分離された領域にあるものとは見なされない。

「・子ども達の集団生活は、一つの重要な資源として見なされる。ワーカー達はグループを促進し、活用すべきである。」

さあ次が藤林氏の講演です。題は「国連ガイドラインを意識した日本の児童福祉改革の展望—児童ソーシャルワークと社会的養護の関係を中心に—」。その話の展開はだいたい予想できました。日本の社会的養護が欧米に比べていかに遅れているかを資料をもとにあげつらって、子供の代替養育に関する国連指針（2009年）を寄り所として、「新しい社会的養育ビジョン」について解説する。

氏は、児童相談所の所長を15年間勤めておられるということでしたが、施設現場についてあまり御存知ないというのが話を聞いての印象でした。確かにただ漫然と日々をすごし、自立力の欠ける子供を社会に放り出している施設もあるのかもしれないが、職員も子供も必死に自分の運命を変えるべく努力をしている施設もあることに気付いてもらわねばなりません。アキヒコ君とアサミさんの姿をどう受けとめられたのでしょうか。

氏は施設否定の根拠になる一つのケースを紹介されました。ある生活保護ケースワーカーからの報告です。30歳前の青年が生活保護受給に際して、ワーカーに対して、「お前らのせい」で自分は「一匹狼」になったと凄んでにらみつけたというのです。この青年は、未婚の母から生まれ、乳児院、児童養護施設で暮らし、16歳で高校中退して社会に出たとか。氏は施設の長期入所が彼の人生を狂わしたと考えられているようでした。日本の児童養護施設の入所期間が長いことに「心を痛める」とも発言されました。また、現在のアメリカのパーマネンシー保障のやり方には信頼を寄せておられるようで、「30年前のアメリカと現在の日本は同じような状態だ」とも述べられました。

児童相談所の所長であるし医師でもある藤林氏の話は、一般人にはすごく説得力のあるものなのでしょう。おそらく色んな所で講演されているとみえ、話しぶりは確信に満ちたものでした。

次に私の講演ですが、予定通り初めにアサミさんとアキヒコ君にそれぞれ10分程度、長い施設生活だったけれども大学進学し、これから卒業して社会貢献しようとしている姿を皆様に見て聞いていただきました。

私の話の内容は、この通信でも繰り返し書いてきたことですので、ここでは省略させていただきますが、最後の結論の部分だけここに書き写しておきます。

「今施設現場は、人材の確保と養成に大きな課題を抱えている。児童養護施設の子供たちの中には、すばらしい資質や才能を持っている子もいる。この子供たちを、人材として養成していくことこそが我々の使命（ミッション）ではないか。私は、友愛園の大学生たちを、『友愛バンド』と呼んでいる。そういう道を探ることが『高

機能化』である。その機能は、弱体化した一般家庭の子供たちの、自立支援にも生かされるであろうし、『日本型の社会的養育システム』を確立していくことにつながる」

最後の「鼎談」は、当然あまりかみ合いませんでした。アメリカのパーマネンシー保障の考え方は破綻していると細井先生が指摘されましたので、藤林氏も動揺されていたのではないかと思います。私は、先ほどの「一匹狼」の話、また「心を痛める」という発言については、取り下げしてほしいとお願いしました。児童相談所の所長がこのようなケースを持ち出して施設批判をするのは不適切（印象操作）だと思いますし、「心を痛める」は、目の前のアキヒコ君、アサミさんに対して失礼な言葉だと感じたからです。2人には、母親がいますが、施設生活が長くても親との関係が崩れているわけでもない、これこそがパーマネンシー保障ではないでしょうか。

私は最後に藤林氏に質問をしました、児童相談所改革にあと何年かかるのかと。氏の返事は曖昧でした。おそらく、厚労省レベルではなく国家プロジェクトでこの児童相談所改革をやらないと、この養育ビジョンは絵に描いた餅どころか、この社会的養護・養育（施設・里親）の枠組みそのものが、アメリカのように崩壊していくのではないかと、私は危惧しているのです。児童相談所が本質的に変わらなければ、おそらく数字合わせに走るようになるでしょう。そのことは、所長である氏が一番分かっているはずです。

このような機会を作って下さった細井勇先生に感謝申し上げますと同時に、在野の一施設長の話に耳を傾けてくださいました藤林武史先生にも感謝申し上げます。私たちは現場の人間です。これからも、子供の未来づくりのために、努力を重ねていきます。ありがとうございました。